

「一番であり続けるということ」

九州学生卓球連盟 副幹事長 岩下華菜

この度「日学連アゴラ」に文章を掲載しないかというお話をいただき、誠に感謝いたします。貴重な経験になればと思っております。

お話をいただいたとき何について書こうか、どんな思いで書こうか考えましたが、やはり私が人生の半分以上の時間をかけた卓球のことについて書いていこうと思います。今回その中でも私が選手として、最も感じてきた「一番であり続けること」の難しさを伝えていけたらと思います。

大学生まで卓球を続けてきた多くの方は幼いころから卓球をしていたのではないのでしょうか。始めたきっかけは様々だと思います。皆さんはそんな卓球を始めたころの自分の目標を覚えていますか。県で一位になりたい、あの人に勝ちたい、親を喜ばせたいなど…私は始めた当初は、ただひたすらに白球を追いかけていました。しかし、競技歴が長くなるにつれて1番になりたいという思いが強くなっていきました。そこからというものの毎日練習に明け暮れ、今ではあり得ませんが、24時間練習として真夜中に寝ずに練習をしたこともありました。もちろん結果はついてきて、優勝をしたこともあります。ここで初めて気づいたこと、それは1番になることより、1番になり続けるということのほうが苦しく、難しいということです。

「勝ちたい」から「負けたくない」という気持ちが大きくなっていきました。周りからのプレッシャー、期待も大きくなっていきました。本当に毎日苦しかったし極限まで追い込まれていたことを今でも覚えています。でも1番であり続けなければならない、勝ち続けなければならない、どのような競技においても楽しさ、感動、残酷さは紙一重です。だからこそスポーツは面白い、勝った瞬間の感動、負けた瞬間の悔しさいろいろな気持ちが交錯する会場に立つことが何よりも楽しかった。

私は4年生で競技自体はもう引退しましたが、叶うならあの苦しかった日々に戻りたいと思います。だからこそ現役の皆さんにはもっと自分を追い込んで、たくさん練習してほしいと思っています。どれだけ練習してもきっと後悔は何かしら残ります。けれど、もう一度あの舞台に立ちたい、引退したときそう思えるような今を過ごしてください。

何かで1番になることは奇跡に近いことだと私は思っています。卓球に限らず本当に些細なことでもいいです。自分の趣味でも、得意なことでも…

なにかで1番になって社会人になったとき誇れるような素敵な思い出を大学生活で作ってほしいと思います。

また、どれだけ時間がかかってもいいから、感謝できる人間になること、人にしっかり拍手ができる人間に今読んでくれている皆様そして私もなればいいと思います。

長くなりましたが最後まで読んでくださりありがとうございました。